

製品名: NIPA (リン酸化 Ser354) ウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab05112**

研究使用のみ

概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	WB,ICC/IF,ELISA
反応性	人間、マウス、ラット、サル
標識	非共役
修飾	リン酸化
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

応用

希釈倍率	WB 1:500-1:2000,ICC/IF 1:200-1:1000,ELISA 1:20000-1:40000
分子量	55kDa

抗原情報

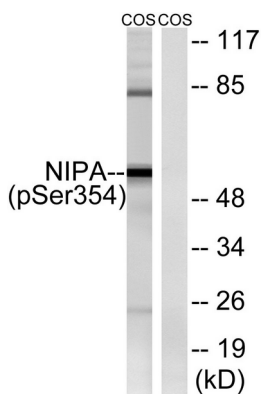
遺伝子名	ZC3HC1
別名	ZC3HC1; NIPA; HSPC216; Nuclear-interacting partner of ALK; Nuclear-interacting partner of anaplastic lymphoma kinase; hNIPA; Zinc finger C3HC-type protein 1
遺伝子 ID	51530.0
SwissProt ID	Q86WB0
免疫原	抗血清は、Ser354 のリン酸化部位周辺のヒト NIPA 由来の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 320-369

背景

この遺伝子は、細胞分裂の開始を制御する SCF 型 E3 ユビキチンリガーゼ複合体の構成要素である F ボックス含有タンパク質をコードしています。細胞周期における G2/M 期移行には、サイクリン B1 タンパク質とサイクリン依存性キナーゼ 1 タンパク質の相互作用が必要です。活性化されたユビキチンリガーゼ複合体はサイクリン B1 タンパク質を分解標的とし、有糸分裂への移行を阻害します。[RefSeq 提供、2013 年 8 月]、注意: F ボックスドメインを含むことが報告されています (PubMed:16009132)。しかしながら、そのようなドメインはいかなる検出法によっても予測されない。、発生段階:G0/G1 期に弱く発現し、S 期および G2/M 期に豊富に発現し、その後大幅に減少する。、ドメイン:F ボックス様領域は、SKP1A との相互作用に必要である。、機能:SCF 型 E3 リガーゼ複合体 SCF(NIPA)の必須成分。この複合体は、サイクリン B1(CCNB1)のユビキチン化とそれに続く分解を媒介することで、有糸分裂開始を制御する。細胞周期依存性リン酸化により SCF(NIPA)複合体の組み立てが調節され、CCNB1 のユビキチン化活性が間期に制限される。不活性化されると、間期に CCNB1 が核に蓄積し、未熟な有糸分裂開始が生じる。NPM-ALK を介したシグナル伝達イベントにおいて、抗アポトーシスの役割を果たす可能性がある。、経路:タンパク質修飾、タンパク質ユビキチン化。、PTM:リン酸化。G2/M 期に Ser 残基がリン酸化されるが、S 期および G0 期にはリン酸化されない。また、Tyr 残基が弱くリン酸化されることもある。細胞周期依存的リン酸化の過程で主要な部位である Ser-354 のリン酸化により、SCF(NIPA)複合体からの解離が起こり、それによって有糸分裂開始につながる CCNB1 の分解が妨げられる。、類似性:1 つの C3HC 型ジンクフィンガーを含む。、サブユニット:チロシンリン酸化依存的に NPM-ALK 融合タンパク質と相互作用する。SKP1 と相互作用する。Ser-354 がリン酸化されていない場合、SKP1A、RBX1、および CUL1 と SCF(NIPA) E3 複合体を形成する。CCNB1 と相互作用する。組織特異性:広く発現している。心臓、骨格筋、精巣で高発現している。脳、胎盤、肺、腎臓、肝臓、膵臓、脾臓、胸腺、前立腺、卵巣、小腸、結腸で発現する。白血球では弱い発現、または全く発現しない。

研究分野

画像データ



HU 2nM で 24 時間処理した COS7 細胞のライセートを NIPA (リン酸化 Ser354) 抗体を用いてウェスタンブロット解析した。右レーンはリン酸化ペプチドでブロッキングされている。